

オーガナイズドセッション (OS)

以下の3セッションが予定されています。

OSでの講演を希望される方は、各セッションのオーガナイザーに直接お問い合わせ下さい。

なお、OSの企画の申込は既に締め切っています。

前回までと同様に、セッションの様式、講演者等は、オーガナイザーが自由に構成することができます。

【OS-A】近接リモートセンシングを活用した陸域生態系モニタリングの高度化に向けて

主催：JapanFlux、リモートセンシング・GIS研究部会

オーガナイザー：小野圭介（農研機構農業環境変動研究センター）・細井文樹（東京大学）

連絡先：小野圭介（onok@affrc.go.jp）

フラックスタワーは近接リモートセンシングのプラットフォームとしても機能し、フェノロジーの把握やフラックス代替指標の開発に貢献してきました。

他方、実験室や圃場でのパイオイメージングや植物フェノミクス分野では、情報科学の発展と相まって新たなセンシング・画像解析技術が続々開発されており、タワー観測への応用が期待されるものも多数あります。

そこで、本OSでは、近接リモートセンシングに関する研究発表を広く募集し、情報や成果の共有を通じて個々の研究の深化や陸域生態系モニタリングの発展に向けた議論を行いたいと考えています。

【OS-B】様々な手法・データを用いた作物の収量予測とその応用

オーガナイザー：増富祐司（茨城大学）・大吉慶（宇宙航空研究開発機構）・滝本貴弘（農研機構農業環境変動研究センター）・飯泉仁之直（農研機構農業環境変動研究センター）

連絡先：飯泉仁之直（iizumit@affrc.go.jp）

国際市場における食料価格は、2008年および2010/2011の食料危機の後、低下してきたが、未だ2000年代初期の低い水準には戻らず、高止まりが続いている。

2011年のG20カンヌ・サミット最終宣言に基づいて、現在、「農業市場情報システム（AMIS）」と、衛星リモートセンシングを活用した「世界農業地理モニタリング・イニシアティブ（GEOGLAM）」が運用されている。これらのシステムは、食料市場情報の信頼性、正確性、適時性、比較可能性の向上および作物生産の把握に貢献している。これらのシステムに収量予測機能を付与できれば一層の機能強化につながる。そこで、本OSでは、気象データや衛星データ、あるいは深層学習などの統計モデルやプロセスモデルなど様々なデータ・手法を用いた収量予測とその応用について研究発表を広く募集する。収量予測の研究・応用について現状を整理し、今後の課題などを議論することを本OSの目的とする。なお、本OSでは時空間スケール・予測手法・対象作物は問わない。収量予測の応用事例や収量予測を支えるデータの高度化などについて発表も歓迎する。

【OS-C】高温期の温室環境制御の課題解決

主 催： 園芸工学研究部会

オーガナイザー：後藤英司（千葉大学）・富士原和宏（東京大学）

連絡先：後藤英司（goto@faculty.chiba-u.jp）

我が国の施設園芸では周年生産を目指す商業温室が増加している。その多くは高度な統合環境制御システムを備え、温湿度および日射を制御して、高温期にも生産することにチャレンジしている。しかし、高温期に室内を好適環境条件に制御するのは難易度が高く、解決すべき課題が多数ある。本セッションではこれらの課題を精査し、海外を含めた研究開発動向を把握し、今後本分野の研究者・技術者が取り組むべきテーマを議論する。